



年間第 23 主日 (ルカ 14:25-33)

持ち物を一切捨てるのはたやすいことではない

「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」 (14・27) 「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

(14・33) イエスの言葉が歳を重ねるごとに重みを増してきます。歳を重ねても身軽になり、イエスに付き従うことを最優先したいものです。

高校野球にちょっと興味のある方は、清峰高校の元監督が、現在山梨学院大附属高校の野球部の監督を務めていることはご存知でしょう。この監督がなぜ高校を移ったのか、事情は知りませんが、環境が大いに変わったことは間違いありません。かつては長崎県内のライバル校がどこで、相手の長所短所よく知っていたでしょう。県内の有望な中学生も把握していて、数年後のチーム構想を練るのも難しくなかったでしょう。

何より、今現在のチームの状態を把握するのにも、これまでの積み重ねで生徒の力を発揮させる方法も見えていたでしょう。それが学校が変わる、しかも他県に移ると、すべてを手放さなければならなくなります。ふつうなら、今まで育ててきた選手を置いて、新しい学校の選手を育ててみようというのは、冒険の域を超えて危険ですらあります。

例えとして、長崎県民によく知られた監督を使ってみました。今週の福音朗読の結びにある「だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」という招きは、先の監督が経験したくらいの環境の変化を言っているわけです。

自分の持ち物を一切捨てると言っても、例えば県内の別の高校の監督に就任するというのであれば、清峰高校の野球部選手も含め、自分の手の内にあるようなものです。けれども九州も離れ、他県に行く。これくらいの行動であれば、自分の持ち物を一切捨てる行動でしょう。同時にそれは、これまで背負っていた物が一切無くなるのですから、より確実に、「自分の十字架を背負ってついて来る」自分の十字架を背負ってイエス・キリストについて行くことも可能になるのだと思います。

「私と私の後継者に、尊敬と従順を約束しますか」「約束します」
1992年の3月17日、司祭叙階式の中で島本大司教様に返事をしました。この約束はこれから自分の十字架を背負いますという約束と言っても良いでしょう。この日から背負い始めた自分の十字架は、今は背負い始めたときよりもはるかに重く、責任あるものになりました。

最近特に思うのは、転勤しても「前任地の知識も含めて積み上げた財産があり、新任地で働くために役に立っている」ということです。田平教会は献堂百周年を去年迎えましたが、皆さんには初めて経験した百周年かも知れませんが、私は二度目でした。以前の経験が、ある場面では役に立ち、ある場面では足を引っ張ったかも知れません。

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人とし

てわたしの弟子ではありえない。」私にとって、このイエスの言葉は歳を重ねるごとに難しくなっています。難しくても、いつかイエスの弟子となれるように、自分の持ち物を一切失ってもそれで自分がイエスに自由に従うようになれるのであれば構わない。そういう心境に達したいと思っています。

年間第 24 主日(ルカ 15:1-32△15:1-10)